

## 夏のファイル●大谷ゆかり

封書を手に小走りすればはつ夏の朝の風が軽くて白い

幾度も跳びあがる子の指のさき青きもみじが時折さやぐ

六月に生まれたわれにあたたかし傘を落ちくる雨の匂い

うたぶくろもつ蛙たち歌の輪の弾み月夜の田んぼも弾む

少年の命の位置を高くして夏の振子となれるブランコ

ベンチにも百日紅にも影が伸びかけはひかりの残す足跡

早口なはばたき方の紋白蝶 一羽のすすめ首をかしげる

菓子折の青きしおりの「風そよぐなら的小川」に心もそよぐ

イモウトノブツチンプリンヲタベタノネあの日机の角が見ていた

前髪に鉄そろりと入れている夕べ世界は五ミリで変わる

ウエリントン眼鏡をたたみ枕辺の淡きともしげ分かち合いたり

白っぽいローランサンの色調の夢をあなたとくぐりぬけゆく

夏花壇に水そそぎつつ人のいぬ島へあかるく降る雨思う

珈琲の水に銀のさじ触れてからりからりと晴れゆくわたし

約束を風やひかりと交わすたび蜻蛉の胸はかたくふくらむ

夕立に濡れて光れるひざがしら鉄砲百合の的となりたり

運命をものともせずに蝉が鳴く夏は巨大な一本の樹だ

きらきらの長さ測らん川沿いの小道に一步一步を刻む

この夏の圧縮ファイルを沢蟹が未来へ運ぶ背中にのせて

砂浜へきやらめる落ちて永遠につづく広さをきやらめる眼る

### 受賞の言葉 大谷ゆかり

今回が、八回目のチャレンジでした。

途中、応募をやめたのですが、四、五名の方々から「続けてみたら?」と励まされ、二〇一四年に再挑戦。結果、心の花賞や各選者賞の作品に、自分のいい加減さを思い知られました。その後入れ替えたつもりの心が、ふあーと飛んでいかないよう、おへそに力を入れております。たら、苦手な連作が、少しづつ楽しく感じられるようになりました。

佐佐木幸綱先生、選考委員のみなさま、すぐに落ち込む私の手を離さずいてくれる方々、ありがとうございます。おかげさまで第一歌集『ホライズン』も出すことができました。更に短歌を好きになりました。

